

静岡県立大学附属図書館

シリーズ 私の一冊の本

看護学部 竹熊カツマタ 麻子 先生

中村 哲 著

『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』

草薙閲覧室 2階 333.826//N37 NHK 出版

今、世界中で戦争や紛争が続き、世界には重い空気が立ち込めています。このような時代に、平和を創り出す為の働きに生涯を捧げたひとりの日本人医師が書き綴った著書を紹介したいと思います。中村哲先生の『天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い』です。

私は現在看護学部で、国際看護という領域で教鞭をとっています。私が看護の道を志したのも、その後国際保健の領域を学んだのも、振り返ってみると子供の頃に JOSC (日本キリスト教海外医療協力会) から海外に派遣されていた岩村昇医師や中村哲医師たちがネパール、パキスタン、またアフガニスタンで取り組まれていた医療活動や現地の様子を伺ったり、活動支援をするために使用済みの切手を集めたりしたことが原点になっています。

中村先生はこの本の中で「これは、医師である私が、現地活動 30 年を振り返り、どうしてアフガニスタンで活動をはじめたのか、その後、どうして医療活動以上に井戸を掘り、用水路を拓くことに力を傾けはじめたのか、その経緯を紹介したものです。」と述べています。最初、現地のハンセン病や結核など患者の治療や貧困層人々の診療活動に携わっていた医師が、病を治療するだけでは根本的な問題の解決には至らない現実に直面しました。猛威を振るう大旱魃で生業であった農業や遊牧ができなくなった人々は食べ物や水がなく瀕死の状態です。ある者は生きる為に武装勢力に加わり、ある者は難民となっていったのです。

中村先生は難民を支援する活動よりも難民を作らないためにはどうしたらよいか？武装勢力に入った男たちが家族と幸せな生活ができるようになるためには、用水路を作り農業を復興させ、人々の食卓に温かい食べ物が供されるようになることが何よりも大切であるという結論に至ります。中村先生は 1600 本以上の井戸を掘り、25 キロ以上に及ぶ用水路を仲間と共に切り開きました。そこにはゆるぎない信念と命への畏敬が込められています。

大学生の皆さんには是非中村哲先生がどのような事からパキスタンやアフガニスタンに赴くという人生の選択をされたのかという軌跡を知って頂きたいと思います。進路や人生で悩む時に先生も若い時に色々と悩みながら人生の選択をされたことに勇気をもらえるかもしれません。中村先生は 2019 年 12 月 4 日にアフガニスタンで武装グループに銃撃されて亡くなりました。先生の遺志は現地の人々に受け継がれ用水路はいまも作られています。